論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（　心理学　）	氏名	中 里　直 樹
学位授与の要件	学位規則第４条第①・２項該当		

論　文　題　目

日本人の Well-being の低さに関する要因の検討：
自由選択の感覚を低める日本の社会環境

論文審査担当者

主　　査　　教授　森 永　康 子
審査委員　　教授　湯 澤　正 通
審査委員　　教授　杉 村　和 美
審査委員　　准教授　中 島　健 一 郎

〔論文審査の要旨〕

日本は豊かになったがそこで暮らす人々（日本人）の Well-being は，他の先進諸国に比べると，それほど高くない。当該論文は，この原因について，個人の持つ自由選択の感覚とその個人を取り巻く社会環境の両者を取り上げて，その関連について検討した５つの研究をまとめたものである。

論文は４章から構成されている。第１章では，Well-being の定義とともに，それを規定する要因として，従来の研究は対人関係や収入などに焦点を当ててきたこと，近年では自由選択の感覚が重要な規定因であることが示唆されるようになってきたことが紹介されている。さらに，自由選択の感覚を規定するものとして，個人が暮らす環境の関係流動性（人間関係がどの程度流動的かあるいは固定的か）に注目し，検討すべきモデルとして「関係流動性の低さによって形成される排除回避傾向が自由選択の感覚を低減させ，結果的に Well-being を低下させる」というプロセスが提出されている。

第２章では世界価値観調査のうち 1981 年から 2011 年までの 6 回のデータを利用し，日本と比較する国として米国を取り上げ検討した結果，調査年に関わらず，両国ともに自由選択の感覚が Well-being（人生満足度）の最も重要な規定因の一つであること，さらに，両国の自由選択の感覚の差異が Well-being の差異を説明することが報告された。

世界価値観調査は，自由選択の感覚も Well-being の指標も，それぞれ１項目で測定されたものである。この問題から，第３章では自由選択の感覚を測定する項目を複数含んだ尺度が作成され，この尺度を用いた検討が行われた。まず，日本の大学生を対象とした検討

により，自由選択の感覚が Well-being を規定することが報告された。次に，日本の社会人を対象とした検討により，関係流動性から Well-being に至る上述のプロセスが確認された。すなわち，人間関係が固定的である（関係流動性が低い）ことにより，他者から排除されることを避ける傾向が高まり，このことによって自由選択の感覚が低くなり，結果的に Well-being が低くなることが実証されたのである。さらに，このプロセスは，日米の社会人を対象とした調査によって，関係流動性の高い米国を比較対象とした検討によっても確認された。

第４章では，これらの研究をもとに，社会環境と個人の Well-being の関連についての考察が行われ，研究の意義および限界や今後の課題について言及された。

当該論文は次の３点において高く評価できる。

1）日本人の Well-being にとって自由選択の感覚が重要であることを，さまざまなサンプルを用いて示し，Well-being の研究分野に新しい視点をもたらしたこと。

2）米国との比較を通して，社会環境の差異が自由選択の感覚に影響をもたらしており，結果的に日本人の Well-being の低さを生み出していることを実証的に明確にしたこと。

3）５つの研究のそれぞれが，それにふさわしい緻密な統計手法を用いて検討されていること。

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（心理学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成　29 年　2 月　14 日